

市民学習会：第52回戦後教育史を学ぶ  
 倉林順一さんのライフヒストリーを聞く  
**子どもの本音に初めて耳を傾けた**  
 —教壇復帰と適応指導教室勤務の7年—

〒371-0026 群馬県前橋市大手町3-1-10 教育会館内

Tel & fax 027-235-8876

‘08. 9. 25 (木) 発行

群馬県高校教育研究所発行：編集/橋本寛文

7月12日(土)午後2時より前橋市総合福祉会館で、標記のテーマで現職の倉林順一さんのライフヒストリーをお伺いしました。

生徒は無事、高経大附属に移行させましたが、6名の先生方は教員としてではなく、職員として高崎市教委管轄の学校以外の施設へ異動させられました。倉林先生は存在すら知らなかつ

た「適応指導教室」へ異動したのです。不登校児との生活の中、一人ひとりの子ども



のホンネに耳を傾け、彼らの生き方に共感するようになります。その中で、子どもに

は誰でも自分で自分を育てる力を持っていることを実感します。今日の学校教育で一番欠けている“待つこと”の実践です。お忙しい方は、23pの(5)「子どもは自分で育つ力を持っている」からお読みください

い。尚、正確さを期すため加筆・訂正、付記があります。

目	次
1. 管理職と心を一に出来ない —あなたは市教委に楯突いているわけ?…1p	(3)「ああ、…でもやめておきます」……16p
2. 付設「適応指導教室」 (1)「オレたち…普通…」……3p	(4)「お父さんの悩んでいる姿を想像できます」と伝えてください。……20p
(2)「建学の精神」にふさわしい人事?…9p	(5)子どもは自分で育つ力を持っている 23p
3. 子どものホンネに初めて耳を傾けた (1)やりたいことをすればいい……11p	4. 本より人が好き (1)ご自身が開花……26p
(2)癩癩K君とリーダー君……12p	(2)生徒の良さを測れる物指が欲しい…28p
	【付】関山禮子さんの仕事(障害児の絵)33p

## 1. 管理職と心を一に出来ない

—あなたは市教委に楯突いているわけ？

**平野:** 前は高市女の転学問題の闘いの中で生徒たちは無事に転学を果たしたが、先生方がどうであったかについては次回に伺うということでした。今日は「適応指導教室」を中心にお伺いしますが、まずは転学にまつわる先生方のいきさつからお伺いしたいと思います。

**倉林:** 3月の卒業式が終わった後、人事異動の話が来たわけですが、異動希望者は別として、我々はそのまま生徒と一緒に高経大附属へ移行することを望んでいました。ところが、高崎市教委から全員の希望は受け入れられないと通告してきたのです。基本的には高経大附属は新しい学校なので無条件の異動はないとのことでした。そういう状況の中で希望が叶えられない教師の中にはやむなく県立高校への異動を申し出る職員も出てきました。つらい選択だったと思います。しかしまた、何人かは最後まで高経大附属への異動を希望する姿勢を見せていました。最終的には6人の先生が県立高校への異動を決意し、6人の先生が希望し続けながら新しい学校には受け入れられない状況が3月の半ば過ぎまでありました。結局、市教委側で受け入れたくない先生が6人出てしまったのです。

**平野:** 表向きには受け入れる教職員と受け入れられない教員についてどういう説明をしていたのですか。

**倉林:** 理由についての説明は一切ありませんでした。決まらない6人に対して市教委の部・課長が来て、個人面接をしました。そのとき、紙に書いた3つの選択肢を示しました。一つは県立への異動、二つは高崎市教委管轄の学校以外の施設への異動、三つは退職するというものでした。（驚きの声）

**平野:** 手書きメモでなく、正式文書として示されたのですか。

**倉林:** そうです。そして、課長が私に対して「倉林さん、あなたは市教委に楯突いているわけ？」と真顔で聞きました。「楯突いてはいませんよ。私は自分の意見を言っているだけで、意見の相違だけでしょう」と答えたら「うーん」となって聞いていましたね。結局この6人を県立へ異動させることはできず、終業式の日、24日に内示がありました。市教委事務局・図書館・公民館に各一名ずつ、二人が教育研究所、私が適応指導教室に異動を命じられたわけです。

気持としては内示が出てもそれを受け入れられないので、不満であることを訴え続けました。生徒にはもしかしたら最後かなと思いつつも、最後まで頑張ると伝えておきました。

**平野:** で、デッドエンドはいつだったのですか。

**倉林:** 市教委からは内示後は何もありませんでした。

**平野:** 復帰希望の闘いは続けたわけですね。

**倉林:**この6人は4月からそれぞれの職場に行ったのですが、教壇に戻そうという運動を立ち上げました。

**平野:**教員を教職以外の職に移すわけですから一般的に言っても、専門性をもった人を移すことについては労基法などの問題が絡んで、当然論点になることですよ。ということで、現職復帰を求めたというわけですね。

**倉林:**我々は教員として採用された身分ですから、教員として働くのが当然のことで、この事態は異常だということを訴え続けました。高崎市の人事委員会、「公平委員会」というのですが、そこにも不服の申し立てをしました。後々回答が来ました。それによると、「管理職と心を一にして新しい学校で教育を取り組めない」というのが理由だと文書に認めてありました。

**平野:**本当にそれが「公平委員会」の回答ですか？

**倉林:**そういう理由で市教委は皆さんを受け入れないのは正当と認められるというものでした。異例だと思いました。そんなことを文書にして、理由としてで出せるのかと思いましたね。

**平野:**公平委員会の結論としては余りにも根拠薄弱な理由ですね。最近、高経大の先生が公平委員会に訴えて現職復帰を果たしたという事例がありましたよね。びっくりしますね。ということで、職場復帰の運動を続けながら新しい職場で働き始めたわけですね。

**倉林:**4月1日に辞令をもらいまして、ばらばらの職場で働くことになりましたが、一方では教壇に戻せという運動を続けているわけで、新しい職場で上手く受け入れられるかどうかという心配はありました。それぞれの職場では職員の皆さんがそれぞれ一生懸命取り組んでおられるのですから、「職場復帰運動」にかまけていたのでは受け入れられない。私たちもそれぞれの職場で全力投球をする、職場の皆さんと一緒に働くことが大事な姿勢だろうと確認しあって職場へ向かいました。実際、良く働いたと思いますし、職場の皆さんにも受け入れられたと自負しています。

## 2.付設「適応指導教室」

### (1)「オレたち…普通…」

**平野:**で、倉林さんの場合は「適応指導教室」に移られたわけですが、まず、適応指導教室についてご説明いただけますか。

**倉林:**他の5人の皆さんは配置先を聞けば、どういう職場なのかがすぐに分かると思うのですが、私の場合は「適応指導教室」という存在自身を知りませんし、所在もよく分かりませんでした。

それは、中央小学校の近くにある2階建ての「言語等指導教育教室」（以下、言語教室）という建物の中にありました。その言語教室というのは、言語教室と情緒教室、幼児教室からなります。学校に行っているけれども友達と上手く関係が

結べない子どもや、言葉をうまく発することができない子どもたちを、決められた日・時間に呼んで授業の代わりに指導するという性質のものです。通級制度と呼ばれています。適応指導教室というのは、それとは別で、平成5年に当時の文部省の通達を受けて言語教室を借りて不登校の小・中学生を指導する場所として設置されたものです。

**平野:**それは目的の中に「不登校」という文字は入っていたのですか。

**倉林:**そうです。

**平野:**自閉症についての共通理解ができるまでは情緒障害というカテゴリーで扱われていたと聞いていましたが…。

**倉林:**実際には自閉傾向の子たちもいましたが、それ以外に学習障害LDであるとかADHD、書くこと、読むこと、計算することが苦手でも授業にはついていけない子どもたちを情緒教室が指導するという状況でした。言語教室は、中央小の付属施設であると同時に高崎一中の教室でもありましたから、そこで働く職員は中央小・一中の教員たちでした。それと就学前のお子さんたちも来ていました。室長は代々退職校長が市の嘱託として勤めていましたので、併設された適応指導教室の室長も彼が兼任する形をとっていました。勿論室長一人では対応できませんから、言語教室の先生たちが手伝っていました。そこへ私が配置され、身分は高経大附属に籍を置いたまま

高崎市の事務職員として勤務することになりました。事務職員にはいろいろランクがあるらしく、専門員という肩書きがついていました。高崎市ではランクによって椅子が違うそうで、私のところには肘掛け椅子が届けられました。でも、この肘掛が邪魔になって机に合わないのをお返しして、皆さんの使っている椅子と同じものを使わせてもらいました。

最初は何も分かりませんでしたので、室長さんや他の職員の仕事ぶりを見ながら十数人の高崎地区の中学生たちと一緒に生活することになりました。本来なら適応指導教室を作った時点で、きちんと職員を配置して柔軟に指導できる体制が必要だったのですが、実際には不登校の生徒たちを上手く受け入れられない仕組みになっていて、皆さん、非常に苦勞していました。例えば、不登校の生徒に「少しでも学校に行く努力をしてください」と指導するのですが、これにはいろいろな意味が含まれています。その一つは、一日でも登校している生徒であれば「不登校生徒」としてでなく、「情緒教室」の生徒としてカウントできますから、先生方が時間割の中で指導ができます。「概ね登校している」ことは大切な条件でした。そういう遣り繰りをしながら、先生方が指導していました。

**平野:**そうすると、月に一度くらいなら登校できる生徒たちがかろうじて残ったということになるのですかね。逆にいうと、それが出来ない子は引っかからなかったと…。

**倉林:**なんとか登校できる子どももいましたが、そういう子どもばかりではありません。「何がしたい？」と聞かれて「勉強がしたい」と答え、「勉強したい子は学校へ行くんだよ」と言われた時に、「学校にも行けないし、ここにも来られない」と追いつめられる子がいるわけです。学校に行けないで相談に来た子に学校に行きなさいと指導しているのですから矛盾ですよ。そう伝えることで、学校に行く気持ちを引き出そうとか、適応指導教室に適応してしまうことを避けよう、登校できる子どもを受け入れることで指導しやすい条件を維持しようという意図があったにせよ、子どもたちには厳しい言葉でした。受け入れるときも一週間に一回、何曜日と制限していました。

もう一つ、自閉傾向の子どもなど、他からの刺激に敏感に反応してしまう子どもにとっては、適応指導教室の子のように元気で遊びまわる子たちが同居すること自体、指導に支障がありました。非常に肩身の狭い思いで存在している様子が見えました。何らかの問題を抱えている子どもが多いわけですが、不登校だから必ずしも障害があるわけではなく、元気で、頭の中では自分はここの子どもたちとは少し違うという思いを持ちながら来ている中学生もいました。

そういう子の中で、2ヶ月ほど経った6月に、中三の男子と女子が「先生！ちょっと来て、来て！」と私を呼んで、保護者の小さな待合室へ連れて行ったので

す。「オレたち先生、特に問題があるわけじゃないんだよ。普通なんだよ。学校へも行きゃあ行けるんだよ」と突然言い始めたのです。初めは意味がよく分からなかったのですが、よく聞いてみると、自分たちが何か特別の障害をもっていて学校に行けていないと思われているけれど本当は違う。普通なんだというんですね。ただ、学校に行きたくない、学校にいられないというだけだということです。

「学校へ行かなくちゃいけないのかい、先生!？」という質問を受けました。「行けないから行かないのだから行きたくなければ行かなくていいんだよ」と答えたら、彼らは納得して、ここにいていいんだと思ったようです。

彼らがわざわざ待合室に呼んだ理由も分かりました。個別指導の小さな部屋にはカメラが備え付けてあって、それは監視するという意味ではないのですが、そこでいつも自分たちが見られているというふうに思って、彼らは非常にストレスをためていたのです。待合室にはカメラはありません。「オレらはいつも見られているんだよ、だからここへ来たんだよ」。指導室の天井のカメラが作動すると、小さな赤いランプがつくのです。「ホラ、見て！」と言いながら、タタタッと録画室へ走って行って、誰が見ているか覗きに行くのです。敏感でした。後から思うと、学校へ行けない子がここなら安心していられるという場所ではない適応指導教室だったという思いがします。監視

されるような感じで、ストレスの高い場所だったのでしょう。ちょっと暴れるとすぐ「静かにしなさい」と注意される…。

**平野:**倉林さん呼び出したのは、話し相手として倉林さんを認知したからですよ。どの辺りからそうなったのでしょうか。

**倉林:**私は話しをする時間を非常に大事にしました。今までの教師生活の中で、学校を辞めた子もいたし、休みがちな子もいましたが、ほんとにしっかり向き合って話を聞くという体験はそうはなかったなと、そこに行って初めて思いました。授業もないわけですから、話をすることが大事なこととすぐ実感しました。それで、部屋でカードゲームなどをするだけでなく、話もよく聞きました。話を聞くと今までなにがあったかなど、ほんとに彼らはよくしゃべるのです。そういうふう話を聞いてくれることで、この先生ならば少しは信用してやってもいいかなという感じを持ったのではないのでしょうか。

**平野:**学校へ行けといいませんか。

**倉林:**室長たちが「ここは勉強するところではないんだよ。勉強したかったら学校へ行きなさい」という言葉を聞いたとき、正直ショックでした。足を怪我して医者に行った子に医者が「歩けないのか。なおしてあげるから（その前に）歩いてみなさい。」というのと全く同じだと思いました。それで「適応指導教室」の存在意義があるのかという思いがしました。たとえば、子どもたちを学校にもどしてやろうという意図があったとしても、その言

うという意図があったとしても、その言葉では良い展開は望めないと思いました。

**平野:**行き場所を失ったから来ているのに来ちゃいけないといわれるのですからね…。

**倉林:**来ちゃいけないとまではいいませんでしたけど…。それに反発したわけではないのですが、自分なりに納得の行く仕事をしようと思ったときに、彼らとしっかり話をすることがとても大事だろうと思ったのです。話を聞く、ゲームをする、プレイルームで卓球もできましたので、そういう遊びを通じて彼らとつながりを持つことに努めました。

**平野:**そういうスタンスで彼らと話せる人が今までいなかったのですね。

**倉林:**言語教室の先生方は個別指導の時間割が組まれています私にはそれが無いのです。私はいつでも関れましたから。一人ひとりが悩みながら傷つきながら、保護者も疲れ果てるくらいいろいろ心配しながらここにやってくる人が多いわけで、子どもや保護者の話をよく聞くことはすごく大事な仕事だったのです。学校にいる先生方にはなかなかそういう時間を作れませんから、私の立場では仕事がとてもやり易いと思いました。この子たちと飽きるまで十分時間をとって話し合うことができましたから、私にとっては快い時を過ごすことができました。

高経附の教壇を追われた他の5人の同僚は子ども相手ではなく、一般市民が相手だったり、本が相手だったり、そうい

う仕事をしていましたから、それと比べて私は恵まれていたと思います。

**平野:**勤務するまでは何をするとおころかは分からなかったですからね。行ってみたら“瓢箪から駒”だった…

**倉林:**皆さんそれぞれに生き生きと勤務なさっていたようですが…。(笑)

**平野:**ただ、職場でのスタンスで言えば、他の職員の方々とは微妙な関係ではなかったのですか。

**倉林:**(適応指導教室の)子どもたちに自由に振舞っていいというお墨付きを与えてしまうと、ここで個別指導をおとなしく静かに受けている子どもたちにとって邪魔になるという感覚があったので、どうやって折り合いを付けていくかというのは大変重要な問題でした。子どもたちも自分たちが必ずしも歓迎されていないということを感じていました。私が行ってからは、(適応指導教室のことについては)次第に任されるような雰囲気になっていきましたから、この子どもたちとどのように生活すべきか、いろいろ考え、工夫するようになっていきました。ただ、子どもたちの心が解放されて元気が出れば出るほど、例えば、中学生は身体を動かしたいと思うので、プレイルームでバスケットをしていたらスピーカーにボールがぶつかってスピーカーが宙吊りになるとか、ちょっと騒音をかうようなこともありました。

私は高市女でテニス部の顧問でしたし、地域のジュニアテニスの手伝いをしてい

たことから、駐車場を利用してテニスをするようになりました。子どもたちもじきにテニスが好きになりました。そのうち、鳥川緑地に良いテニスコートがあるので、使用料の減免措置をしてもらって月一くらいでしたが、練習の成果を見るためにサイクリングで通う“サイクリング&テニス”という企画を立ち上げました。生徒は非常に喜んで、テニスの出来ない子もお弁当を持って出かけました。

**平野:**みんな自転車で通ってきていたのですか。

**倉林:**保護者が送ってくれた子もいました。子どもたちも先生方も“サイクリングテニス”と呼んで、喜んでくれました。他所の人からは「自転車に乗ってテニスをするのですか」と聞かれたこともありましたが。(笑)あとで、通ってくる子どもたちが多くなっていったのですが、彼らは口々にもっと広い場所が欲しいというようになりました。その子たちにとっては、カウンセリングとか「どうしてなんだらうね」という質問めいた話よりは無条件に外へ出て遊ぶ、子供同士が遊ぶほうがすごく開放感に浸れてよかったのですね。適応指導という名で大人が言葉で説得したりする場面が多いのですが、それでは中々上手くいきません。

**平野:**その頃の変化を時間経過で言うとうなるのでしょうか。

**倉林:**私が行ったのは1994(平6)年ですが、その後2002、03(平14、15)年頃まではすごい勢いで不登校が増えていった時

期です。子どもの数が減っていく中での増加ですからこれは実質的には大変な増加です。相談も増えていきました。私が行ってから、適応指導教室に通ってくる子どもがどんどん増えていったものですから、言語教室の先生方は、もっと大きなところに移ってもらいたいと強く言うようになっていました。

**平野:**最初の10人でも同居ではキャパとしてはいっぱい感じですからね。

**倉林:**そうです。先生方は一様に(市は)他の場所を確保すべきだと言っていましたし、事実、市教委の関係者や教育研究所の所長が会議で訪れる度に職員たちは他の場所の確保を訴えていました。

私より2年遅れて退職教頭の嘱託職員が私と一緒に適応指導教室を担当することになりました。この方は、校長でなかったからというわけでもないのですが、自分から身体を動かしてテニスや卓球をする方で、私と同じような気持でやってくれました。「自分はこれまで大きな声で怒鳴る仕事をずっとやってきたけれど、ここにくる子どもにはそれではやっていけない」と言い、これまでとは違った観点で取り組もうと決意されていました。この人とは協力し合ってやっていくことが出来ました。

話は少し戻りますが、1993(平5)年に高崎市適応指導教室が出来ましたが、同時に中央公民館の一室を借りて、別の適応指導教室ができました。言語教室の方をA教室、中央公民館をB教室と呼んで

A、B、二つの適応指導教室でスタートしていたのです。B教室には二人の嘱託担当者がいて一人は教育研究所相談員を兼務し、もう一人が教員志望の若い女性でした。月・水・金の3日間開校していました。

94(平6)年に私が着任し、その2年後、二つの適応指導教室時代が3年過ぎたあと、96(平8)年にA教室の機能を市内並榎町にある「勤労青少年ホーム」に移しました。ここは、働く青年たちが仕事が終わった後、5時過ぎからやってきて運動したり料理や華道、茶道などの勉強をする施設ですが、昼間が空いているので、利用できることになりました。翌97(平9)年には台新田の「青年センター」内に「台新田教室」ができて、高崎市の適応指導教室は都合4つになりました。言語教室のA教室は「高松教室」として相談受け入れ場所としてのみ残り、他の三つが子どもたちの活動の場として位置付けられました。私は教員の身分ですから、出勤先が必要で、高松教室に出勤してから、「勤労青少年ホーム」へ行くということになりました。生徒たちには三つの教室のどこを選んでも良いと言ってありました。並榎の教室は毎日開いていますから、中央公民館の教室が休みの日にはこちらに来る生徒もいました。そうすると、各教室で交流が起こりますから、新しい人間関係が出来たりして広がりが出てきました。ある生徒は、仲良しの友達が出来て、8キロ先の台新田教室まで自

転車でいった例もあります。並榎と台新田には本格的な体育館があって、そこはバレーもバドミントンもバスケット、テニスなどいろいろな運動を本格的に出来る施設でした。

**平野:**それだけの施設をどうやって使えるようになったのですか。

**倉林:**勤労青少年ホームについては、高崎市の施設だからというので、教育研究所が「商工課」とかけあって融通を付けてくれたのです。それまでは3階の図書館はほとんど使われていない状態で、締め切ったままで埃を被っていました。そこを我々の教室にしました。その職員は午後出勤でしたから、午後には一般市民にも開放していたのですが、私たちは朝から使っていました。アクティブ館というニックネームがついていましたので、私たちの教室も「アクティブ並榎教室」と名付けました。台新田は青年をとって「ユース台新田」。中央公民館は「パブリック末広教室」です。

**平野:**教室としてはそのように広がっていったのですか。それではここでいったん休憩を取って、ここまでで質問があれば受けて、この後はここで生活をともにした子どもたちのお話を伺っていきましょう。

## (2)「建学の精神」にふさわしい人事？

**河崎さん:**6人の先生方が市教委の意に反するとして異動させられたわけですが、管理職と心を一に出来る先生方というの



はどういうことで選んだのでしょうか。

**倉林:**私自身が聞きたいくらいです。(大笑)いろいろ想像することしか出来ませんね。なぜだかわかりません。6人のうち2人は県への異動を希望しましたが、時期的に遅くなってしまい、間に合いませんでした。例えば、松本さんはPTAの係として、いわば事務局長的な仕事をしていたのですが、市の方針に反する方向へPTAの意志をまとめる役割を果たし、私の場合は一年担任として学級通信に事実を伝えたことが「心を一に出来ない」というように受け取られたのかとしか推測すること出来ません。これが根拠という明らかなものがあるわけではありません。

**河崎さん:**それでは6人の先生方のうちお二人の理由をはっきりしているようですが、残りの4人の先生方は「心を一にする」様な態度を見せれば、附属の方に向けたのですかね。人数からいっても6人は排除しなければ員数合わせは出来ないというので他の4人の先生方も一緒に出された形になったのですかね。

**倉林:**どちらにしても詳しい説明がないので分からないのです。私や松本さんの

場合も、生徒や保護者の立場に立って活動したことは確かですが、他の先生方も同じような気持で学校改革の問題に取り組んでいました。市教委の立場に立っていた先生はおりませんし、生徒を守る方向で職員集団はまとまっていた。

**河崎さん:**当時の新聞では、なぜ6人だけ排除されたかが分かりませんでした。不自然だったですね。

**倉林:**強いて共通点を考えれば、みなさん弁の立つ人だということですかね。職員会議では躊躇することなく発言していました。

**松本さん:**公平委員会の示した理由には二つありました。もう一つは高経大附属の建学の精神にそぐわないというものです。

**橋本:**逆に、新しい教員を6人入れたくって異動させたということはないのですか。

**松本さん:**6人のほかに、希望しないで県立に異動させられた6人がいますから12名が出されたわけですね。

**平野:**結局、全職員何名中、何人出されたのですか。

**倉林:**全職員約60名中、希望しての異動人事もありましたが、附属へ異動したのは20名前後ではなかったでしょうか。

**針谷さん:**私はちょっと違った立場から見えていました。新校長がかなり高邁な理

想を掲げて新しい学校づくりをするために原稿用紙で100枚くらいの文書を全職員に配布しましたよね。あの校長さんにすれば、自分の理想とする学校を作るためには彼がふさわしいと考える人材を集めたかったのだと思います。集めようと



したときに、旧高市女の教職員はそれに該当するようには見えなかった。本当なら、倉林さんや松本さんたちを新しい学校づくりのブレーンにするくらいの卓越した指導力があればまた局面は変わったのだらうと思いますが、残念ながら彼にはなかった。それで実際に連れてきた人物には理想を実現することは出来なかった。その後、渋川の市長選に落選しお気の毒だったのですが、実践に耐えられない、彼の学んだ「教育学」とは一体全体何だったのかという疑問を持たざるを得ませんでした。

**平井さん:**私は当時「県民の会」の事務局長をしていたのですが、その記録によると、6人を出しておきながら、国語は専任が2人出されて、地公臨が1人、非常勤2人を採用、社会科も専任が2人減って地公臨が2人、非常勤2人採用、英語は専任が4人減って地公臨1名、非常勤4名採用という人事でした。急場しのぎとしか思えません。「理想の実現」には

程遠い人事とは思いませんか。私たちは組合攻撃ではないかと考えざるを得ませんでした。そう考えるといろいろ辻褃が合うのです。

**平野:**「建学の精神」にふさわしい教職員を集めてはいないということですね。

**針谷さん:**その当時の市教委と新校長との力関係にも関係しているのではないのでしょうか。

\*\*\*\*\*<休憩>\*\*\*\*\*

### 3.子どものホンネに初めて耳を傾けた

#### (1)やりたいことをすればいい

**平野:**それでは、適応指導教室の実践の具体的事例、どんな生徒たちとどんな生活を共にし、どんな変化があったのか、具体的に伺っていきましょうと思います。

**倉林:**いろんな子がいて、不登校の子どもを見ていて当たり前のことですが、その様子は一様ではないわけです。もっと広げていけば、学校に行っている子の中にもいろいろな子がいるわけですからね。

不登校の子の中には非常にショッキングな出来事で傷ついて学校に行けなくなった子、勉強が出来なくて学校に適應できない子、どうして勉強が出来ないかという、怠けているからではなくて、漢字がほとんど覚えられない、書けない、算数の計算が本当に苦手、授業が始まると教室にいられないと思ってしまう子、「何回いったら分かるの」といつも注意

され、叱責の言葉ばかり投げつけられ学校がいやになってしまった子、というような特別の個性を持った子どもたちがいます。中には医師から自閉傾向、広汎性発達障害と診断され、投薬を受けている子もいます。情緒教室で指導を必要とする子や知的な発達が遅れているとは判断されなくて、普通学級にいるけれども、学習についていくことができずに非常にストレスをためている子などなど、いろいろな問題を抱えている子が集まってきており、私自身、だんだんそういう認識が持たざるをえなくなっていました。じっくり腰を据えて話を聞くだけではこの子たちの問題が前進することにはならないと考えるようになりましたね。

例えば、ある特別な部分の学習障害のある子に、何をどう教えればいいのか、専門的な知識や実践を積んでいかないとなかなか指導にならない。しかし、正直、そういう指導というのは中々成果が上がらないもので、私ら素人が専門的な個別指導をするというのは、考えているほど簡単ではないのです。そこで、私はその子の「アンタのここが素晴らしい」という部分をたくさん見つけて、彼らに快いメッセージを与え続ける方がよいのではないかと考えるようになりました。

一人一人がみな違うから指導法も一つではないのですが、共通していた指示は、「アクティブ並榎教室へ来たら時間割はありません。勉強したい人は相談にのります。一人でいたければそれでもいいし、

運動をやりたければ、誰か探して一緒にやったらいい。ここの教室では自分の出来ること、やりたいことをすればいい。」というものでした。教育研究所のスタッフからは「そうはいつでもやはりある程度は時間割があったほうがよいのではないか。ダラダラした生活になってしまわないか。」というアドバイスをもらいました。

人数も増えるに従いスタッフも増え、室長と私と嘱託の退職教頭と若い女性二人、合計5人が毎日いるようになりました。それから、高崎市には「ボランティアさん」と呼ぶ人たちがいてくれました。彼女たちは高崎市の中央公民館で開いているカウンセリング協会の講習会に参加した人たちで、教育研究所は時間単位で採用して、どちらかというと集団に入れない子どもたちの話を聞いてもらう役割を果たしてくれました。彼女たちも含めてこの教室でどういうふうに過ごしてもらったらいいか、いつも話し合っていました。その中で、最終的には時間割は作らないという合意が出来たのです。

勉強の部屋も確保し、ここでは騒がないという約束が出来ていましたので、そこがそう賑やかになることは最後までありませんでした。一人か二人がボランティアさんや若い女性スタッフと1対1で静かに勉強しているという感じでした。中に高校受験を控えた子がいまして、「みんなそんなに遊んでいいんかい」などとまるで学校へいつている生徒のよう

な口をきく子もいましたが。(笑) ほとんどの子たちは朝から体育館に行って飛び跳ねており、特にバドミントンが人気でした。いろんな子が来て、何をしてもいいわけですから、私は、あちこちにアンテナを立てて、この子はどう過ごすのだろうと考えながら見ていました。私は運動の方に付きっ切りだったので、午前も午後とも汗だくになって動いていました。お蔭様で身体にとってもいい感じで、(笑) 忙しくてもストレスを感じずに生活できました。

教員としてあのようなところに配置されることは普通はないわけで、もししたらこんな楽しい仕事をしたのは私くらいかもしれませんね(笑)。若いときの私からは信じられないくらい健康になっていました。

## (2) 癩癩K君とリーダー君

**倉林:** どんな子がいたかを紹介してみます。

1人目は小学校四年生から学校へ行かなくなり、中学一年のとき「高松教室」へ来た男の子です。よく癩癩を起こすのでK君としておきます。「学校でなにがあったの？」と聞いたら、「いつも先生に怒られていた」「なんで怒られたの?」「確かに僕が友だちを殴ったからなんだけど、それには理由があるのに先生はいつもお前が悪いというんだ」「何したん?」「机を蹴ったり、椅子を投げたりした」「なんで?」と聞くと、理由は忘

れてしまったらしく、上手く説明できませんでした。彼は高松教室で先生方と関れるようになり、やがて同世代の中学生とかかわる練習をするためにアクティブ並榎教室にやってきました。そこで小学生や中学生とテレビゲームで遊べるようになり、「友達といると楽しい」と言えるようになったのですが、見ているとやはり自分勝手なのです。2、3人で対戦するテレビゲームをやっていたときのことです。彼は戦わないで物陰に隠れているので一緒にやっている子が、「普通はそんなことしないよ」と言ったら突然キーッとなって立ち上がって「普通ってのはどういうんだ！」と怒ったのです。(笑)自分が普通でないといわれたことでパニック状態になってしまった。「普通ってのは…、普通ってのは…」と上手く言葉はまとまらないのですが、普通ってのはありえなくて、みんなそれぞれのやり方があるんだということが言いたいらしいのです。その途端、椅子を蹴ったら背もたれがパリンと割れてしまって、みんなに「アーアア」と言われたらもうどうしようもなく、私のいる職員室へ飛び込んできて「普通じゃないといわれた」と訴え、泣き喚くのです。一緒にゲームをやっている子は「アァまたチクッた」と遠くから見ている。彼の訴えは切りもなくずっと続きます。「だって、きみが悪いんじゃないのかい？」と言いたい気持ちを抑えて聞いていると、同じことを何度も何度も繰り返す。彼は高松教室の近

くのマンションに住んでいて、私が帰るといって、「それじゃあ、高松教室で続きを聞いてください」と言う。彼はそうやって事ある毎に合計3、4時間くらい訴え続けます。

**平野:**すごいエネルギーですね。

**倉林:**彼は、母親が「特別な子」だという意識があって、月に1回、東京の大学の先生のところへ個別指導を受けに通っていました。そういう彼が喧嘩をしながら、それでも他人と関るようになってから、私に訴え続ける中で、ふと「ボクも悪いんですけどね」と言えるようになったのです。

**平野:**それにはどのくらいかかりましたか。

**倉林:**本当に一年中問題を起こしながら丸2年はかかりましたかね。3年かかったかもしれません。

彼を取り巻く子たちにもいろいろな子がいるのですが、一人、非常にしっかりしている子がいました。彼は小学五年生のときに大好きな父親が突然死してしまって、二つ上の兄さんと学校へ行けなくなってしまったのです。彼はK君より一つ年下なのですが、年下でありながら遊ぶときにはリーダーシップをとっていました。リーダー君と呼びましょう。彼が皆に「缶蹴りしよう！」といっていると、K君も一緒に体育館についていきました。K君はそれまでに缶蹴りの経験がなく、ルールも知らなかったのですが、知ってるふりして参加しました。要領の悪いK君

はすぐに見つかってしまう。それが面白くないというのでリーダー君が、隠れる範囲をもっと広くしようと提案し、体育館のギャラリーまで広げ、さらにはそこから屋根に出ても良いという風にルールを変えていくと、「ルールを変えるのはよくない」とK君は納得しません。その都度、私のところへ訴えてくるのです。

「ルールをどんどん変えちゃう。第一、屋根に上がっちゃいけないって室長に言われているのに…」。かっこいいリーダー君についていきたいけれど、しかし彼の指示に従えないジレンマがあって、彼とエキサイティングでありながら、ストレスもためる間柄になっている。リーダー君は「先生、俺がガマンすればいいんですよ」と私に言ってきたことがありました。すごく状況を分かっているんですね。「いや、何も君がガマンすることはないよ。」という、「エッ、いいんですか」なんて言ったりする。彼は自分がどう振舞えばよいのかいつも考えている子でした。K君を守っていると思っていた私から承認をもらって安心するのですが、「言いたいことを言ってもいいよ」と言われても、言い返すわけでもありません。父親が生きてさえいれば不登校になることもなくて楽しい中学生生活を送っていたらと思う生徒でした。

ある冬の日、雪が降ったのでリーダー君は皆に「雪合戦をしよう」と提案しました。小学生もみな外へ出て、雪合戦を始めました。リーダー君は自分から小さ

い子の標的になり、おどけながら逃げ回ったり、建物の陰に隠れたりしていたのですが、ここぞチャンスとみてK君が思いきり雪玉をぶつけ始めました。気がついてみるとK君だけが夢中になって投げつけていたのです。私はこの様子を3階の職員室からたまたま見ていたのですが、「ああ、また問題が起こるな」と思いました。そこへリーダー君がやって来たので、「頭にこないか？」と聞いたら、「別に…」とすました顔していました。俺の役目だと考えている雰囲気がありましたね。K君は当然のことながら、中学生たちから批判の目で見られていました。

その後、K君はアクティブ並榎教室は居心地が悪く感じて、パブリックグループと接触するようになった。そこに似たような子がいたものですからその子と意気が合ってパブリック教室に通うようになりました。パブリック教室の子どもたちはユース台新田教室も利用していたので、K君も行ってみたいと思うようになりました。ある日K君が、「台新田教室へ自転車で行っていいですか」と聞くので「自分だけでいけるの？」と聞くと「台新田はたしか、高速道路の下をくぐってまっすぐ行けばいいんですよ」と言う。以前に母親の車で行ったことがあると言うのです。彼はほとんど地図が読めません。彼の頭の中の地図が正しいかどうか不安だったのですが、地図を書いてやり、私の携帯の番号を教えて「分からなくなったら電話をするんだよ」とい

って、行かせました。するとまもなく電話があつて、「先生、ちょっと道が分からないんですけど…」。「地図はどうした?」「地図は忘れました」「今どこにいるか分かる?」「分かりません」。教えようがない。「電柱を探しなさい。そこに漢字で地名が書いてあるから言ってみて」「はい、ちょっと待ってください。シバサキと書いてあります。」「高崎からまっすぐ行った道かい?」「いえ、1回曲がりました」「じゃ、そこまで戻ってまた電話ください」また電話がありました。「来た道と同じ方向に進んでごらん。信号があるからそこについたら電話をしなさい」「はい」その次電話がかかってきて「着きました」。速い。さっきの信号まで行ったら、ユース台新田の教室は見えるのです。彼は頭の中で想像したり、操作したりすることは得意ではないのですが、目に見えたものを触りながらすることは出来るのです。彼は学習障害の診断を受けていました。そのとき1回行っただけで道を覚えました。それから「ユースの子」になって、こちらと交流するときには仲介役をするまでになりましたね。彼は中学を卒業したときに、「僕は高校には行かない」といっていましたが、一年後にお母さんに連れられてアメリカのミシガン州にある有名なフリースクール、クロンララハイスクールに入るために移住しました。当時、彼は恋をしてガールフレンドが出来たものからそれを嫌がっていました。「僕は日

本食しか食べられないから、向こうへ行ったら飢え死にするだろう」と言って頑張ったのですが、お母さんが強引に連れて行きました。時々彼からは私の自宅に国際電話が入るようになり、初めは帰りたいという訴えだったのですが、そのうち片言の英語交じりの会話になってきました。英語は絶対ダメだと言っていましたし、アルファベットも書けませんでしたから、私も厳しい生活になるのではと思っていました。が、「昨日はひどいサンダーストームでした」と英単語交じりの話になっていきました。彼はその高校を卒業して、地域のコミュニティーカレッジに入って、大学生になりました。二度ほど日本に帰ってきて、適応指導教室時代の気のいい友達の家泊まったりして、私も話す機会がありましたが、「やはり、僕は文章が書けないんですよ」というんです。今はコミュニティーカレッジで文章が書けるようにして、ゆくゆくは本当の大学へ行って心理学を勉強したいと言っていました。彼なりに成長する場所を見つけた感じがして、お母さんの決断に敬服しますね。

もう一人のリーダー君は雪をぶつけられた年が明けて、中学三年生になろうとした4月に突然「オレ、学校に戻ります」と言って学校に通い始めました。定期試験で学校が早く終わったときなどに学校の友達を連れて遊びに来ました。「君、どうして学校に戻ったの?」と聞いてみたのですが、「別に理由なんてありません

んよ。」という返事。「なんかあるだろう」とさらに水を向けると「いやあ、こいつが無理やり連れて行ったんですよ」と友達のせいにしたり、どこまでが本当か分からないのですが、高校へ進学して、福祉の勉強をしました。生徒会の副会長となり、推薦で福祉の大学へ進学しました。しかし、お母さんが心臓を悪くし入院したものですから、彼は1年で大学を辞めて今、老人施設で働いています。1年前に適応指導教室の同窓会があって会いましたが、非常に元気でした。力があり、自分で何でも出来る子でした。

### (3)「ああ、…でもやめておきます」

—不満とやさしさが同居しているU君—

**倉林:**K君が仲良くなったU君は、中学一年生のとき高松教室に来たのですが、他の友達とは遊ぼうとしませんでした。「卓球やろう！」と誘っても「いいです」、「ゲームやろう！」と言っても「いいです」と答え、ずっと一人でいました。「勉強は?」「それもいいです」。

退職教頭の先生が心配して話をするようになり、時々勉強の相手をするようになったのですが、漢字がほとんど書けないのです。自分の名前は漢字で書けましたが、中学の「中」だけが漢字で後はひらがな。彼はバスケットが好きだったので、バスケットを付き合っていました。そのうちバドミントンを教えたら、それにすっかり嵌ってものすごく上達したのです。運動は人とそれほど密着しま

せんから人間関係が苦手な人でも関りやすいところがありますね。まるで指導者のように上手くなりました。時々ボランティアさんなども加わるようになっていたのですが、非常に優しい態度でコーチングするのです。しかも帰るときには「元気でね、身体気をつけくださいね」と言葉をかけていました。また、新しく入ってきた女生徒に「こんにちは、よろしくね。」というなど、温かく接するようになりました。彼の良い面がどんどん見えてきたのです。その彼が、中学3年生の頃に、ふと私にこう言ったのです。「先生、先生！今ボランティアさんと話していて気がついたのですが、右折って右に曲がることなんですね」。彼の頭の中にはいろいろな言葉が記憶されているのだと思うのですが、抽象的な漢字熟語みたいなものはその意味が分かっていなかったのです。

その話を契機に昔のことをいろいろ聞き始めました。そうしたら、彼が小学校に入学したときに担任の先生が「お母さん、U君は自分の名前が書けません。いまは一年生でも自分の名前くらいみんな書けますよ」と言ったのだそうです。これを聞いた母親はU君に一生懸命に文字を教えたそうです。だけど中々覚えないうと、お母さんはU君を無理やり車に乗せて担任の先生が待っている校門前に行き、そこで引き渡すという生活が始まった。彼は小3から不登校になって、非常

に辛かったそうです。そのころ、何か買ってくれるというので父親に車に乗せられて出かけたのですが、山の中腹の学校のようなところで、「学校に行かないならここに入れるぞ!」と脅かされた。U君は、必死になって車にしがみついで泣きながらイヤだと拒否したそうです。実は、自分では頑張ろうと思っているのですが、勉強がほとんど分からなかったんですね。

小5のときにはじめて優しい先生に出会ったそうです。後で知ったのですが、この先生は私たちの教壇復帰運動を支援してくださった先生の奥さんでした。U君は5年生の時に一時復帰出来たのですが、6年生でまたきつい担任に出会ってしまい再び行けなくなってしまい、中1のときに高松教室に来ることになったのです。私と落ち着いて話ができるようになったある時、「相当ストレスがたまっているでしょう」と言ったら、ふと何か言いかけて「ああ、…でもやめておきます」とためらった。「言いたくなければ言わなくていいけれど、言ってしまったほうが楽になることもあるよ」と水を向けると、「お母さんを殺したいと思うことがあるんです」。「でも、お父さんもお母さんも本当は僕のことを心配しているんですね」という。ここが彼のいいところです。激しい不満とやさしい気持ちが心の中に同居している。それが時々コントロールできなくなってしまう。「小学校のとき、土砂降りの中、家を飛び出

したことがあるんです、なんでだか思い出せませんが…」彼なりに葛藤があったのでしょね。そう語ってくれました。

そのときは中学3年で受験を控えていました。彼は高校へは行きたくないと準備をしなかったのですが、突然「青陵高校」を受けてみると言い出しました。それから私とマンツーマンで勉強が始まったのですが、1年目は落ちてしまいました。彼は「勉強していないのだから落ちるのは当然と思う」と淡々としていましたね。

卒業してOBとして教室に来るようになりました。教室のOBやOGが遊びに来ることはそれまでにもあったのですが、中には勝手な振る舞いをする子もいて、室長さんたちから顰蹙をかうようなこともありました。それで、一時はOB、OGが来ることを認めるかどうかで議論したことがありました。最終的には、彼らと私たち指導者の間に出来た大事な人間関係を断ち切るのではなくて、彼らの居場所としてもしっかり機能を果たそうということが確認されました。ここでの人間関係を土台に新しい社会に出ようとしている彼らをしっかり支えようということになったのです。勿論、皆さんが心配するような振る舞いはしないようにという釘は刺しましたが。彼は勉強をしに来て、優しい言葉をみんなに投げかけ、初めてのボランティアさんの中には「へえ、あの人OB?先生かと思った!」(笑)と思われるほどでした。彼は必死に勉強し

ました。清陵高校は英・数・国の3科目から2科目を選んで受験するのですが、英語と国語を選びました。そうしたら、英語の理解がものすごく早いのです。漢字は書けなくてもアルファベットは書ける子が時々います。国語はやはり大変でした。詩を鑑賞するなんてことは苦手中の苦手でしたね。虹を歌った詩などは何を言っているのかチンプンカンプン。“夏に店先で水を撒いている少女がいる”という情景を言葉では読んでもイメージが浮かばないように、設問に答えられない。で、イメージ作りの訓練をだいぶしました。算数も一時勉強したのですが、これも難しかったですね。例えば、 $\square \times 3 = 6$ の $\square$ の中に何が入るかという問題が分からないのです。この $\square$ の部分にXにしたのが方程式なんだよ、なんて説明しました。私にいつもくっついていて小4の自閉的な子に聞くと「2」と答える。「スゴイなお前」と受験生が感動している(笑)。このU君は頑張って高校に入学できました。でも、入ったら教科書の文が全然理解できなくて困っていました。それでも必死になって勉強していました。午前中は「教室」へ来て、午後から高校へ行く生活を続けました。

1学期の終り頃に意見発表会というのがあり、クラスの代表に、次いで学年代表にもなり、そのたびに何を書くか相談を受けました。「君に書けることは、なぜ学校へ行けなくなり、どうして元気になれたかくらいじゃないかい」とアドバ

イスしたのですが、彼は自分でそれを書きあげました。作文は出来ないと思っていたのですが、「自分で考えていることでいいんですか」「いいですよ」と言ったら書けたのです。言葉の一つ一つを自分の気持ちや記憶と照らし合わせながらきめていきました。できあがる文章に彼は納得しながら書き上げました。制限時間内で発表する練習もしました。彼は学校代表になり中部地区の大会に出場することになりました。そのときに先生から「もっと訴えるものが欲しい」と指導されたらしいのですが、彼はそういう言葉に非常に敏感で、「僕はそういうのはイヤだ…そういうのなら出ないと言っちゃったんですけど…」と言います。そして「自分で思ったことだけを書けばいいんですよ」と言うのです。「そうだよ。ウソ言ってもしょうがないよね」と言ったら納得して提出したようです。彼は校内では2位だったのですが、1位の作品は複雑な家庭に育った女子生徒の発表で、父娘のすさまじい関係、死にたいと思ったことなどを表現力たっぷりに語るのだそうです。彼に言わせれば感動的なものなのだそうです。ところが地区大会では逆転して、彼が1番になってしまった。会場を出るときに引率の先生が「二人ともスゴイね、良かったね」と言ったら、彼女が「私は納得がいかない」と言いながら盾を校門に投げつけた。驚いたと同時に、それまでスゴイと思ってきた彼女の態度に反発し、「僕は賞をもらうため

に行ったんじゃない。そんなに1位が欲しいんなら僕は彼女に譲ってもいい」と先生に訴えたそうです。非常に純粋で素直なU君は、彼女の振る舞いを許せなかったようでした。

10月に県大会があり、その日の夜中の12時頃電話がありました。入賞はできなかったが、奨励賞の盾をもらったという報告でした。「すごくうれしい。お母さんが僕を育ててくれたからだ。お母さんに感謝しています。先生が嬉しいときは遠慮なく気持を表現していいと言ったから遅いけど電話しました。いま、オレ泣いてるんです」。感情を表現することを抑えてきたU君の変貌ぶりに感心するばかりでした。

彼は立派な高校生活をして、無事卒業するのですが、やはり上手くいかないことがいろいろありました。例えば、コンビニのアルバイトで商品を陳列する仕事を与えられたのですが、場所が覚えられなくていつも「商売にならない」と怒られていたそうです。卒業後もしばらく職につかないでいろいろアルバイトをしていたのですが、シネマコンプレックスで映写助手の仕事をしました。仕事はとても面白かったそうですが、いつも最後に報告書を書かなければならず、時間がかかるのでそれでまた怒られる。漢字や文章もかなり書けるようになったと思っていたのですが、やはり苦手なものとして残っていたのです。仕事に就くことに非常に悩んだのですが、最終的には自分

はお年寄りの面倒を見るのが合っていると考えて、通信教育で資格を取って、施設に入って仕事を始めました。そこは、病院に付設された大きな施設でしたが、非常に馴染んで、彼の持合の温かい心でお年寄りに接して順調でした。少したつと、職員の一人が独立することになり、誘われてグループホームに移りました。見込まれたのです。ところが、ここで困ってしまいます。小さな施設に移ってから、大きな施設ではなくてすんだ報告書作りが彼に課せられたのです。一生懸命やっているのですが、彼を引き抜いてくれた先輩から様々な言い方で責められた。辞めたいけれど、お金も欲しいし、そして、他の仕事といっても自信がないし、悩んでいるとのことでした。最近彼女が出来できて同棲、籍を入れたので簡単には仕事をやめられないのです。これは去年の今頃のことですが、その後は便りがないので続いていると思います。

このような学習障害傾向の子にとっては後々まで困難が積みまとうのですが、彼の穏やかな心の状態や好青年という印象が適応を助けています。先ほどのK君は誰とでもトラブルを起こしますので疎外されがちだったのですが、U君は実際に仕事上ではいろいろな困難点にぶつかりますが穏やかな性格が幸いしたと言えます。

このように、心が傷ついて適応指導教室にやってくる子の中には、自閉的で適応自体に無理がある子や、学習障害による能力の偏りを持っていて学習になじめ

ない子がいます。彼らも、良いところを見つけてしっかりと評価してあげれば何とか学校生活にも適応できるようになるのですが、学校にその余裕がないためにきびしい状況に追い込まれる子がたくさんいました。そういう子たちから今でも電話やメールがきます。

#### **(4)「お父さんの悩んでいる姿を想像できます」と伝えてください。**

**倉林:**それから、母親たちからも相談を受けます。父親たちから続けて相談を受けることはあまりないのですが、多くの母親が子どものことを本当に心配して一緒に悩んできただけに、彼女たちを支えるのも私の大事な仕事でした。ですから、時には勤務時間を超えて話を聞くこともしばしばでした。幅広く支援することが出来たと思っています。

**平野:**子どもたちと母親たちへの対応は何か分けてしていたのですか。

**倉林:**はい、相談は随時ですので、子どもを送ってきたついでに聞くことが多かったですね。子どもについては時間割がないですから、特に決めてないのですが、他人と関らないタイプの子については、誰が声かけ役をするかは決めておきました。大体は若い二人の女性が何人かを担当していました。ボランティアさんにも何人かはお願いしていましたね。私は教諭という立場上、全員への気配り・目配り役というところでしょうか。お母さんの相談役は初回相談は私と退職教頭の囑

託さんが主に担当しました。

**平野:**継続して相談されたこともあったのですか。

**倉林:**ありました。お母さんが精神的にまいてしまっ、大変な状況にあることがしばしばですから、いつでも来てくださいと言ってありました。中には、上の子が不登校になったら次の子も行かなくなり、更に三番目も行かなくなってしまい、母親が周囲から責められるという例がありました。誰かが支えてあげないと家庭が立ち行かない状態です。

**平野:**その継続というのは、具体的にはどういうふうに？

**倉林:**定期的にというように決めるのではなくお母さんの申し出でやりました。

**平野:**そのときは担当者を決めてしたのですか。

**倉林:**大抵、私に言ってくるので、私が担当しました。時間が遅くなるとアクティブ並榎教室から出なければならぬので、高松教室へ移動して話を聞きました。高松教室は相談の場になっていました。K君のお母さんはいつも来ていましたね。彼女は夫と別れてひとりでK君を育ててきました。気丈な人だけに子育ての辛さにずっと耐えてきたわけで、しっかり話そうとすると涙なしには語れないという場面が多かったですね。

**平野:**そもそも不登校の場合は、本人が適応指導教室まで出てこないケースが大半だと思うのですが、そういう際の親の相談も受け付けたのですか。

**倉林:** いっぱい来ました。そんな場合、子どもが来ないと話になりませんかとは言いません。同様に、お父さんに問題があり、本人との関係がよくないという場合も、お父さんが来なければどうにもならないかという、そんなことはありません。子どもに対しても父親に対しても、来たお母さんを通じて私たちのメッセージを伝えることが出来ると思っていました。この教室は来たいときに来ればいいのであって、一度来たらずっと来なければならぬところでもない、来て何もしなくてもかまわない、来て、すぐに帰ってもかまわない、行事の参加不参加は君らの自由と言うふうに伝えてくださいと話します。そういうふうに間接的なメッセージを送ることで、多くの子が見に来るようになり、そのあと引き続いてくるようになった子が「並榎教室」では多かったですね。見学に来たとき、不登校の子どもたちが楽しそうにワァワァーキャーキャーと歓声をあげながらバドミントンをやったり、ドッジボールをやったりして走り回っているのですから、多くの子たちはすごく安心してやがて通って来るようになりました。そういう様子を見て「学校みたいでいやだ」と言う子も中にはいましたが、お兄ちゃんの相談と一緒にきてきた弟が「僕もここに来たい」と言ったものだから、「おまえはだめだ」と納得させるのに苦労していたお母さんもいましたよ。(笑)

父親が少しはこの子話を聞いてくれ

ればいいのに…と悩んでいるお母さんが多くて、「おばあちゃんとお父さんで私を責めるばかりで、…」という相談が非常に多いのですが、そういう時には、私は「お父さんも心配し、悩んでいる。お父さんの悩んでいる姿は私には想像できます」と言っておいてください、と言います。このメッセージがお父さんに伝わり、その後まもなくご夫婦でやってきたことがありました。父親の理解を得るには「お母さんと同じ立場でやってくださいね。」といっても中々伝わりません。父親には父親なりのやり方、立場とかいろいろあるわけで、お母さんとは違うようなところがどうしてもあって、父親の関り方が基本的にはおかしくないということの間接的に伝えることは大事なことだと思いました。

**平野:** 来てない人に問題があるといってしまうって、返って問題がこじれてしまうことがありますからね。

**倉林:** そうですね。なにか個性的な障害が疑われる子の場合にはなおさら、誰かの所為にしても何も変わっていかない。例え、心配しすぎて子どもを虐待するにしても、心配しすぎかもしれないけれど、心配していることには変わりなくて、そういう思いを認めないと本質的な問題に向かって前進しないと思いますね。

こんなケースもありました。ある母親から「私に被虐待の経験があつて、…」と聞かされたことがあります。そういうときには、そのお母さん自身の幼いころ

の体験をいっぱい語ってもらいました。でもこの話は私にはとても手に負えないものでした。いくら聞いても聞いても自分の体験を語るだけで、本人は少しも変わっていかないもどかしさがありました。そのお母さんは私に依存しているなという感じがするくらい私に頼って、夜でも何でも電話をしてきました。あるときは宴会が始まった途端、ケータイにかかってきて、外で1時間余りしゃべったこともあり、皆さんに同情されたこともあり、皆さんに同情されたこともあり、臨床心理士を交えて検討会を持つのですが、「先生！ 粹ってものがあるから、粹が…」とよくアドバイスを受けてきました。彼らの専門用語で「粹」というのがありますが、相談時間や時間帯、場所などに制限を設け、そこを外すなどというのです。「自分から粹を外すこともありますよ」とあえて反論したこともあります。ただ、自分が「粹」がいらないということではなくて、私に依存しすぎてしまう母親のためにもある程度ルールを守ったほうが良いと後々に思うようになりました。「相談者としての自分はどんなことだってつらくない」という態度を示すことが決して相談相手のためにならないということをだんだん学びましたね。

**平野:**確かに、病理的な人を相手にする場合には、「粹」なしでやったら危険ですからね。

**倉林:**私が辞めた後も教室に電話をして「あの先生はどこへ行ったんですか？」

「あの先生って誰ですか？」「名前は知らないけれど、私を下の名前で呼んでくれた人なんですけど…」と言ったそうです。彼女の家は5人子どもいて全員が教室に来ていました。全員を下の名前で呼ばないと分からないものですから、お母さんも下の名前で呼んでいたのです。倉林先生だということはすぐに分かったけれど「もういないんですよ」といって諦めてもらったそうです。この方は酷いお母さんでした。「自分の子どもは可愛くて仕方がない。この子をいつでも連れ歩きたい。私のキーホルダーにしたい。」というのです。でも、そんなに可愛くてしょうがない子どもに、1ヶ月千円を渡してこれで炊事をしなさいと命じます。長女は真冬でもないのに、毛糸の帽子を目深に被っていました。髪の毛を自分から引き抜いてしまうんですね。下の男の子はやんちゃな子で、ウソついて、母親の財布からお金を抜き取ったり、お姉ちゃんのゲームを持ち出して他人にあげてしまったりを繰り返すものですから、お母さんが私たちの目の前でその子を責めて、ピーンと頭を叩くんですね。その子も心得たもので上手に避けるんです。慣れているんですね。そのお母親さんは、自分は母親にとっては必要のない子だったということ滔々と語るのです。だけど、自分がいましていることが同じことだとは気づかない。自分の被害体験だけを沢山聞かされました。問題の根がとても深いと思わせるケースでした。

**平野:**相談活動をしていると、子どもの問題で相談にきているけれどもそれと同じくらい親の抱えている問題と対応しなければならぬ。そういう意味では親もクライアントになるというふうに接する必要がある場合が非常に多いですね。私も3年間ほど教育センターの教育相談員をしたことがあります。先ほどのK君と母親の話を伺っていて、不登校で相談に来ているケースで、学習障害や自閉症など発達障害系の、ある意味適応困難になるような原因があって行き詰って学校に行けなくなってしまふケースと、もっと狭い意味での、従来から言われている不登校、つまり何か理由があって行けないということがはっきりとは分からないケースがありますね。さっきの父親が亡くなったので学校へ行けなくなったというのは原因ではなくてきっかけに過ぎないわけですね。彼がなぜ行けないのかは、おそらく本人にも分からない、だから行けた理由も分からないというケースだろうと思いますね。僕の実感からすると、発達障害系の子たちはわりと、きっかけさえあれば本人が相談に現れるようになるのだけれど、狭義の不登校の子たちは、本人が相談の場に現れるのはまず少ないので、不登校に関しては親面接が主だったように思います。

**倉林:**親との相談に応じることも多いのですが、元々カウンセリングの勉強をしたことは全くないですから、正直言うと何の方針もなかつたひたすら聞いている

だけという相談が多かったですね。ただ、「聞くことが相談」とも言われますから、それだけでも役割は果たせると感じたのですが。家庭の問題を聞き始めると複雑極まりないので、お母さんにこの危機を何とか乗り越えるために頑張るとは中々いえなくなってしまうことが多かったですね。経済的には裕福かもしれないが、人間的に上手くいかないという場合もあるし、経済的にも大変というのもありました。ですから、私が聞くことで事態が簡単に好転することばかりではありませんでした。

#### (5)子どもは自分で育つ力を持っている

**倉林:**ただ、私がもう一つ感じたのは、発達障害があってもなくても、子ども自身が自分で育つ力を持っているということでした。先ほどのリーダー君が突然「学校に戻る」と言い出したケースは「学校紀要」で報告したくなるようなことで、教育研究所の先生からも勧められました。でも、書くことがないのです。復帰の筋道を説明することができない。もし書くとすれば彼にその力があつたのだとしか言いようがない。私は原因めいたものを探してそこを支えるだけでない、子どもの成長に期待する、子どもの成長をどうやって支えるかという観点も重要ではないかと思いながらやってきました。

その頃は、「教室」は盛況でした。で、そういう話が周辺の市町村の保護者にも口コミで伝わったようです。近隣の市町

村だけでなく県北部の町からも相談に見えました。教室の子どもたちが生き生きとしているので、自分の子どもを寄こしたいと言う。近隣の町にも適応指導教室はできつつありました。高崎市から2、3年遅れで次々と誕生しました。ただ、高崎ほど場所に恵まれていない。運動場の管理人室6畳一間だけ、役場の中の相談室などが多かった。行ってみたら室長さんが「学校には行くもんだよ。親に何か問題はなかったかね、…」。なんとかかすがりたいという思いで相談に行ったお母さん方は信頼感を感じられなかったと言っていました。

こんな相談がありました。学校へ行けなくなったのでお母さんが理由を聞いたけれど何も言わない。学校の先生にいじめがあったのではないかとたずねたら

「ない」と言われた。お父さんが「何で行かないのだ」と詰め寄ったら、何も言わないので叩いてしまった。子どもが家を飛び出して帰ってこない。翌朝、物置にいたのを発見したのですが、父親はそんなに言えないくらいの事情を抱えているならそれ以上は聞かない、学校に行きたくなければ遊んでいればいい、と言ったそうです。でも母親としては何とかしてやりたいというので相談に来ました。お母さんに「自由に過ごしてよい」という伝言を託したら本人がやってきました。彼はうつむいたままほとんどしゃべりませんでした。最後に「高校へは行くの？」と聞いたら、首を横に振る。「なぜ？」

と聞いたが答えないので、「勉強をしたくないの？」と聞いてみた。また首を横に振る。「あの人たちと一緒にだとダメなの？」と言ったら頷いた。余り深く追求するつもりはなかったのですが、「うん」と頷いた瞬間に友達との間にトラブルがあったことを直感して付け足してみました。「自分の悩んでいることを両親に伝えられないことで心配させまいとしているのなら、それはものすごく偉い。すごく偉いことだけれど、自分自身がとてもつらい思いを抱えているのは大変でしょう？そういうときには、そいつをバカヤローと言って心の中で恨んだり憎んだりアイツがいなければ学校に行けたのに、という思いは素直に持っていいんだよ。そうしないともっともっと自分自身が傷ついてしまうから抑えない方がいいんだよ。先生に聞いてもらいたいんだったら、聞いてあげるよ。」というふうに彼に伝えました。すると、彼はもう涙が止まらない。抑えていた気持ちが一気にあふれ出し、下を向いたまま肩をふるわせて泣き出しました。膝に涙がこぼれ落ちるのが見えました。

すかさず「誰だい？」と聞いたら「部活の子」とぼつんと言って、それからはずらすらと話し始めました。相談の後「先生！明日ここに来てもいいですか？」と聞かれたので「ああ、いいですよ。」と答えました。

母親を呼んで「今本人から聞きました。部活の子の何人かに直接暴力を振るわれ

たわけではないのですが、パシリにされたそうです。優しい子だけにつらかったようですよ。ただ、学校の先生に、あの子らにいじめないでほしいとは言ってもらいたくないそうです。ただ、僕が休んでいるのは怠けではなくて、つらいことがあるからだということを知ってほしい、というふうに言っています。」と伝えました。そして、「出来たら、今お伝えしたことをそのまま担任の先生にお伝え願えますか」と付け加えました。何君と何君にいじめられ、彼らに指導してほしいと彼が望んでいるのではないという彼の今の気持ちをそのまま伝えてくださいと頼んだのです。すると、すぐに校長先生と学年主任がやってきて、「有難うございました」とお礼を言われました。そういうふうにするだけで、学校側も助かった。そういうふうに本音を言ってもらえると指導しやすいというわけなのでしょう。それ以後、担任とご家庭の連絡が密になり、母親にすれば本当はいじめっ子を処分してほしいと言う気持ちもあったのですが、本人がそれを望んでいないということを理解し、学校に行きやすい環境を作ってくれば良いというだけ言ったようです。すると担任が、明日の予定、来週の予定などを伝えてくれて、4月から彼は復帰の努力を始めたのです。でも、最初は中々行けなくて、時々アクティブ並榎教室に来ては、みんなから「もう学校ヤメたん？」とからかわれると「そうじゃねえよ」と言いながらも、

徐々に身体慣らしをしながら、1学期の終了間際には適応できるようになり、2学期からは休まず登校できるようになっていました。そして、1年前には地元の高校へは行かない、知ってる子のいっばいいところはイヤだと言っていた話があたかも嘘であるかのように地元の高校へ進学しました。成績が抜群だったようで「お前、なんで進学校に行かなかった？」と級友に言われたと、はにかみながら言っていました。去年大学を卒業して、一流企業に就職しました。彼の、学校に行きたくないという気持ちを想像して見ますと、父親に叩かれても、優しい母親にも言わなかったのは誰にもいえないほど本当に大変な、つらい状況だったのでしょね。おとなしい、くりくり坊主の小柄で純朴な少年でした。初回相談の後、そのまま教室に適応してしまうのかなとも思っていたのですが、教室で過ごしたのは2ヶ月足らずで、まもなく復帰できたのですから、本人の力、適応する力が発揮されたというふうに考えています。

私が上手く聞けたケースでもあるのですが、基本的には彼らが本来持っている力をしっかり信じながらそれを引き出せるような関り方が大事だということを痛感しました。少なくない母親から、親として子どもの本当の話が聞けないことがものすごくつらくて、いっそこの子を殺して私も死のうかと思ったという話を何度も聞きました。本当に何とかしたいと

思いながらどうにもならない、死ぬしかないと思いつめるのだそうです。この少年のお母さんも最初の相談の時にそう言って泣きましたが、子どもを思う気持ちが報われてよかったと思います。

**平野:**本質をついた話ですね。有難うございました。もっともっと子どもたちの話を聞きたいところですが、ちょうど切りの良いところですので、ここでフロアからに質疑に移りたいと思います。

## 4. 本より人が好き

### (1)ご自身が開花

**河崎さん:**倉林先生を適応指導教室へ向けた不当人事は市教委に人を見る目があつた(爆笑)ということになりますか。私は昔、児童相談所にいたものですから、倉林先生は「問題のある先生だけれどもやっていることはものすごくいいことをしている」という話を職員から聞いていました。それで、どういうお人柄なのかという関心があったのですが、今日のお話を伺っていてちょっと考えてしまったことがあるのです。児童相談所というのは子どものことについての専門機関なのです。その専門機関の職員というのは専門職なんですよ。しかし、本当に専門家であるかと言うと、容易じゃない内情を知っているものですから、倉林先生のような方でないと本当の児童相談所の職員は勤まらないんじゃないかと思いましたね。普通の高校の先生が、意に沿わず飛ばさ

れた適応指導教室でいろいろな困難を抱えた生徒と生活を共にする中で、子どもに向かう姿勢というか、愛情いっぱいに接することが出来るように先生ご自身が開花したように感じました。先生のような状況に置かれると、へたをすると自棄になってどうでもいいと物事をほったらかして過ごしてしまう人もいると思うのですが、それが逆に子どもに熱心に向かい合った。それはどこから来ているのですか。もともとの資質なのか、それとも他に何かあるのか、その辺をお尋ねしたいと思います。

**倉林:**最初に触れましたけれど、松本さんたちと、それぞれの職場へ行ったらそこで一生懸命働いている皆さんに迷惑をかけないように仕事をしていこうと約束したのです。どの職場も大切な場所で重要な仕事ですが、私たちは教員なので教壇に立って仕事をするのが当たり前だから復帰運動をするということもわかってもらおうと。でもたしかに、私が図書館勤務を命じられたらこんなに一生懸命にはやらなかったかもしれません。(笑)本より人が好きです。

**河崎さん:**そう思いますね。失礼な言い方だけれども、先生ご自身が成長なさったように思えます。良い人生をすごされたと思いますよ。

**倉林:**公言できませんけど、いいところへ行かせてくれたと思いますよ。すごい経験でした。いま、教員採用試験のお手伝いをしていますが、小学校の教員を目指

しているある女性は、地公臨として養護学校で子どもと1対1で向き合っていたら「特別支援教育」を受けてみようと思うようになったと言っていました。彼女は私と同じような感覚で、1対1で向き合っているとことん話を聞くとか、お互いにコミュニケーションすることの楽しさとか奥深さ、そういうものに気がついたのではないかと思います。40人を相手にしていると、“一人ひとりを見ながら”と口では言うけれど、中々できないことです。一人ひとりの家庭的背景とか心の奥底だとか各自が持っている個性とかまで探りながら付き合うことは難しいですね。それでも学校現場では40人を相手にしながら、立派な実践をやっている方が大勢いらっしゃるから、学校にいながらコミュニケーション能力を磨くことは無理ではないのでしょうか、適応指導教室の指導者という経験も悪いものではありません。小さな声で言います(大笑)。

**平野:**見学に来て自分も参加したいと思うような集団を作れる適応指導教室はほとんどないわけですよ。東京シューレは奥地圭子さんがおつくりになったのですが、彼女は学校に見切りをつけて立ち上げたわけですよ。先生の作った集団は、スタイルは東京シューレに似ていますね。

**針谷さん:**前回の話の中で分かるのですが、そこですでに“教師になり行く道”の下地が作られていたのだと思うのですよ。

県の総合教育センターで教育相談の研修が行われています。悪口を言うわけで

はないのですが、そこを終了して教育相談をしておられる先生方とは一味も二味も感性や指導力に違うものを感じます。私の体験では、巡回カウンセラーとしてブロックごとに回って来られる先生方では高校生の指導は率直に言って出来ませんね。悩みを聞き取る感性にじっくりしない感じが否めませんでした。指導意識が強くて、子どもの悩みへの共感のようなものが希薄なのです。子どもは敏感にカウンセラーの人間性を感じ取っていますからね。ですから、倉林先生のような方にこそ高校生の悩みの聞き役になってもらって、一緒に悩んでもらいたいと思いましたね。いま、公的な形で制度化されているものの中で有効に機能していないものがたくさんあるのですが、巡回カウンセラーなどはその際たるものだと思いますね。これをステップとして管理職にと考えているカウンセラーに子どもが心を開くでしょうか。倉林先生の“教師へなり行く道”は闘病生活を経験しながらも生徒との様々な関り、実践などを通じて形成されたわけで、文科省などが構想しているような研修や免許更新制で教師を育てられると思ったら大間違いですよ。

**平野:**なまじカウンセリングの真似事なんかをしようとしなかったことが幸いしたとも言えますね。

**河崎さん:**昔は私の職場にも「サムライ」といわれる、少し変わった児童福祉司がいて、一生懸命相談にのって悩みを背負

い込んで職場に戻ってくる。そうすると、今のような車社会ではありませんでしたから、勤務時間後、同僚が集まっていっぱい飲みあいながら愚痴を言い合うような形で悩みを聞き、どうしたらいいか語り合ったものですよ。そうすると、お互いに苦労しているなあという連帯感が生まれ、自然に助け合うようになっていくんですよ。いま、学校現場では一人ひとりが孤立しているので、自分だけで問題を囲い込んでいるということをよく聞きます。そういうところでは子ども一人ひとりの気持ちをどう理解したらいいかということ語り合うより、技術的に処理して数字を報告するような形に追い込まれてしまうのではないかと思います。その辺を何とかしないと本当に良い教育は出来ないのではないかと思います。



## (2)生徒の良さを測れる物指が欲しい。

**瀧口さん:**私の倉林先生のイメージは、最初にお会いしたのは高市女の闘いのときでしたが、いつも生徒に寄り添っていらっしゃって、二度目は適応指導教室でしたが、そこでも生徒と一緒に活動していて、そういういつも生徒の側におられる先生だというものでした。前回お話を伺って、ご病気の生活とか針谷先生が指摘した“教師へのなり行く道”とあわせ考え、私なりに分かったような気がしまし

た。いま、現場で最後の教員生活を締めくくろうとなさっていると思うのですが、先ほど河崎さんがおっしゃったような状況の中でどういうふうにお仕事をなさってらっしゃるのか、“いま”をお聞きしたいと思います。また、ここに同僚の田村先生もおられるのでご感想などをいた

だけたらと思います。

**倉林:**学校というのは、県教委に報告するので欠席率とか遅刻率などに非常にこだわるところなのです。毎月、昨年度の比較を含めて詳細なデータを作成して報告します。その数字が校長会で発表され、ワース

トテンやワーストスリーに入ったとかが問題になります。担任から生徒の長期欠席の報告を聞いた校長先生は「あまり欠席が長引くようなら、保護者と早く相談をして決着をつけてもらったほうがよい」と進言しました。不登校というのは欠席数としてカウントされます。学校経営上好ましくない数字として反映されるのですね。私は長く休んでいる生徒には、例えば1/3でも2/3休んでもそれで学校にいられないわけじゃない。規定以上休むと進級できないと言われるかも知れないけど、ここは君の居場所なのだから何時来たってかまわない、授業にでないで先生のところに相談に来てかまわない、それだけの権利があるんだよと言っていま

す。昨日、ある担任が「倉林先生！俺も正直何とか卒業させてやりたいんだけど、数字がもうどうしようもないんですよね。」と言ってきました。正直な発言です。間違いではありません。「あまり甘いことも言えないんですよね」。その通りです。それで、母親を呼んで、いままで取得した単位を生かして通信制で高校生活を送る方法もあることを伝えますと、「ああ、そうですか、それは知らなかった。ありがとうございます。」と納得して、お礼を言って帰って行きました。担任としては当然の仕事をしたのですが、もう一方では、もし、はっきり結論は出ていないけれども、今辞めたくない気持ちがあるならば学校にいつづけてもいいわけで、そういう両方の選択肢があることを伝えても良いと思います。欠席がずっと続いたとき、中途半端な状態が永く続いているという捉え方で、生徒のためを思って方向転換を迫ると生徒には伝わらない話になってしまうと思います。最終的にどういう道を選ぶかはあなたの決断次第、どういう道を選んでもOK、それが大人の証拠だから、行かないというのとでも大事な決断、行くというのも決断、決めるのは何時でもいいし時間をかけるのもいい、相談したければ何時来てくれてもいいよ、という教師がいても良いと思いますね。みんなにそういつてくださいとは中々言えないことですが…。いろいろな言い方があってよいのであつ

て、あたかもどれがダメでどれが正しいという判断ではなく考えてほしいと思いますね。大切なことは、率直な意見を言ったときの生徒や保護者の素直な反応を大切にすることです。それがコミュニケーションです。そういうことを教師同士が率直に言い合えれば良いと思うのですが、その辺がいまは非常に窮屈になっています。どういう指導がどういうふうに評価されるのかがとても気になってしまふ環境があります。人事考課制度で自己申告に違うようなことは出来ないという思いが強く、プレッシャーになっています。それが生徒の方向性に影響を及ぼすようでは好ましくありません。そういうことで、教師がホンネで生徒と語りあえないような状況がいっぱい学校にはあつて、窮屈です。ですから、私は私の立場・考え方で生徒接しているだけで、先生方を変えることは中々難しいことですね。

**針谷さん:**教育相談のキャップをしてるわけですね。

**倉林:**そうです。

**田村さん:**倉林先生が教育相談にいてくれるので、大変心強く思っています。私などは、生徒を見るよりも同僚を見てしまうのです。つつい周りの学年団とかを見てしまうのですが、生徒が倉林先生に相談に行くと安心できる、生徒を見なさいよとってくれる先生がいるというのは教員自身も安心できるのです。来年いなくなっちゃうと大変だと今から心配し

ています。(笑)それだけじゃなくて、倉林先生はどうしてそんなに生徒を受け入れられるのか、ゆったり見ていただけるのだろうか不思議なくらいです。私は、すぐにでも教室に出したいとか慌ててしまうのですが…。



もう一つは、私はどちらかというと生徒は受け入れられるのですが、同僚の教師は余り受け入れられないのです。(大笑) だけど、倉林先生はどんな同僚でも、女の先生の話などを受けとめてくれるのです。確かにみんな悩んでいるんです。大変なんですよ。特に担任を持っていると並大抵のことではない。私なら勝手にしなさいよ、といたくなくすることも、それを倉林先生は辛抱強い聞き手になってくださる。

**倉林:**本当に担任は大変ですよ。

**針谷さん:**来年も断固として残るべきだね。(大笑) 助けられる生徒も教員も沢山出てきますよ。

**倉林:**正直言って、心配な状況があります。女性教師や転勤してきたばかりの教員が担任をもつことが多くなりました。学校の様子や生徒の状況を十分に知らないまま担任を任されるケースが多い。女性には手に負えないのではないかと心配されるクラスを持たざるをえないこともしばしばです。校内の分掌の分担の事情でそうなることもあります。さらには、生徒が折り目正しく生活するかどうかは担任

次第という風潮もある。担任は周りが自分のクラス経営をどう評価するかを気にしないわけにはいかない。それがつつい生徒への厳しさとな

って出てしまう。他人が見ていれば見ているほど厳しい言葉で指導し、生徒の過ちを許せなくなる。本当はゆっくりと時間をかけて関わりたいと思う気持ちがあるのだけれど、そんなに余裕を見せてはられない。だから叱る。生徒は反発しますよね。すると、さらに毅然とした姿勢を見せなければならないと思う。上手くいかないと自分自身を責め、真面目であればあるほど自分を許せない。我慢にガマンを重ねて、そうやってかえってストレスを溜め込んでしまうという危うい状態が見えます。本当はみなが大変さを抱えていて自分だけが苦勞しているのではないと考えてほしい。隣の先生も同じ悩みを持っていると思い、「一緒に考えたい」と学校全体が思っていて欲しいのです。今の校長先生は生徒を前に「支え合う」ことの大切さを強調しました。先生も同じです。生徒だけではなくて教師自身が育つような学校であって欲しいと思います。

**平野:**親たちがそうなのです。不登校の子どもを持つ母親たちは自分たちがどう見

られているかの自己評価に囚われてしまう。それは不登校の原因ではないが、不登校から立ち直らせるのを阻む結果になりがちです。

**倉林:**小さい頃に自分がどう評価されるかをものすごく気にした生活の経験がある人が、成長してもその部分が乗り越えられないことがあります。そして、いつも良い子でなければいけないという不安感が、子どもに向き合うときにも出てしまう。あまり周囲の評価にとらわれないのが大人という意味で、私を含めてもう少し大人に育つ必要があると思います。言わなければならないことは田村さんみたいにはっきり言わなければいけないとは思っているのですが（大笑）、田村さんの心臓がうらやましく思うことが時々あります。（爆笑）

かつては私ももう少しはっきりとものを言う時代がありました。自分と違うものと向き合うとか対立するということは意見の対立であって、人格同士がぶつかるわけではないから怖がる必要はないと考えていました。それはいつでも変わらない原則だと思いますが、最近は修復できないことを恐れて言わずじまいになりがちです。「それも人間だ」と自分を慰めています。今みたいに閉塞的な雰囲気の中ではなおさら自分を解放することが難しいと思います。

**小野関さん:**「母親たち」という発言に一言。母親だけでなく、父親も言いたいことが言えない、したいことも出来ない、

きちんと向き合えない、そういう社会にこそ目を向けなければならぬと思います。

**倉林:**先ほど私もいいましたが、父親が出かけてきて話す機会が非常に少なくて、その父親を駄目な人と断じる立場ではないし、そういつても始まらないので、一緒にテーブルについてもらうには父親も実は苦勞している、悩んでいるということをしつかり認め合った上で話しあわないと駄目なのです。

**小野関さん:**よく話し合って、向かい合っという原点に戻ることが大切だと思うんです。

**平井さん:**私は倉林さんとは高市女問題までは教研で会うくらいだったのですが、闘いを通して感じたのは、持病は喘息なのですが、実践はじっくり取り組むということでした。（笑）持病で苦しんできたから、人と上手に付き合うことを学んだのかもしれませんが。この姿勢がいま最も求められていることだと思うんです。私も家庭訪問のときは徹底的に親と話し込むことにしてきました。そうすることによって見えてくることが多いのです。このライフヒストリーに出た中島昇太郎さ



んと安中で一緒になることがあるのですが、彼が「平井さんね、普通の学校でやっていることと全く逆のことを（不登校の子たちに）毎日やっているのですよ。いまの（普通の）学校はどうなっちゃたんですかね。」と言ったのです。そう言われて振り返ってみると、ケータイいじっちゃいけないの、CDを持ってきてはいけないの、だめダメ駄目と禁止事項だらけ。そういう中では本当の人間は育たないとつくづく感じています。

**倉林:**禁止のモノサシばかり持っていますよね。親にもそういうところがあるが、基本的に学校の物指でない、もっと生徒や子どもの良いところを測れる物指がもう一本欲しいですよね。あんたのここが良いということがポンと測れるね。子どもは毎日それを待っているんですよ。子どもは元々自分を育てる力を持っているけれどなかなか見えない。本人の気づかない良いところを大人が教えてあげればそれで育っていくような気がしますね。校長が毎朝校門で登校してくる生徒に「おっ、来たな、お前は偉い」って声かけすることから始めれば生徒も学校も良くなると思いますよ。前に、教頭とやりあったことがあります。教頭は「遅刻しました」と生徒がいうと「何で遅刻したんだ？」「寝坊しました」「何で寝坊したんだ？」。私は意味のない会話だと言



ったのです。「教頭さん！あの子はこれこれ云々の課題を持った子なのです」と言ったら「どうしてそれを早く言ってくれなかったんだ」（爆笑）「知っていれば言わなかった」（大笑）違う！違う！どの生徒だって良いところを探して、

言って欲しがっている。「遅れてきたことは分かっているのだから、『よく来たね』でいいでしょう」と言った。

その教頭さんは、「倉林先生はコワイ」と言い残してご栄転なさいました。（大笑）決して悪い人ではないのですが、職員室で遅刻の生徒を待っているとそういう不用意な言葉がでてしまうのですかね。松井田では同じような遅刻指導をしたことがあるのですが、途端に欠席が増えました。文句を言われるくらいなら行かないほうがましというわけです。生徒が生き生きとして学校にやってくるようになる何かいい物指が欲しいですね。

**河崎さん:**私は「子どもの権利委員会」のメンバーなのですが、「子どもの権利条約」第12条に“意見表明権”があります。これについて様々な解釈が行われていますが、子どもの意見をどういうふうに捉えるべきなのか、倉林先生のお話を伺って学習してみたいので、そのせつは宜しくお願いします。

**平野:**今日もまた内容の濃いお話を伺うことが出来、有難うございました。（拍手）

昭和小1年 伸ちゃんの絵 (関山禮子さんの仕事から)



一年生の2学期に物語絵「ふわり大男」に取り組みました。何度も何度も読み聞かせしたけれど、伸ちゃんには興味のないことで、話の筋もよく分かっているようでした。「大男だよ。小鳥さんと空を飛んだんだって、良かったね。いいな、いいな。」と私が言うと、伸ちゃんもオーム返しで「大男、いいないいな。」と言って紙に大きな丸を書きました。そして耳目口鼻毛まで一気に書いたので、紙をずらして半分より下も空いていることに気づかせて、「大男のおなか」「大男のお手々」なんて言いながら「最後に小鳥さんが毛をひっぱってくれたよ」と小鳥さんらしい小さな丸を書いたのと線をつなげさせようしました。毎日4、5枚づつ描き15枚にもなったが、どれも同じような絵でした。あるとき、急用で教室を空けたとき、五年の健君が続きを言ってくれ、青空まで描き、色もぬってあったのです。それを見て、これは伸ちゃんの手を借りた健君の絵だと思いました。とすれば、今まで描いた15枚の絵は？翌日、私は「伸ちゃんの描きたいようにどうぞ。」と言って描いてもらったのがこの絵です。

(関山先生談)